上毛新聞 2013/10/9 (14)県央版。

(第三種郵便物承認)

先人の功績 後世に

伊勢崎 八幡沼 開削150年で記念碑

農民たちの陳情で1864年にかんがい用人口沼として完成した伊勢崎市本関町の八幡沼が、来年開削150年を迎えるのを記念し、住民有志が石碑を建立した。7日に除幕式を開き、発起人らが先人の思いを後世に伝えようと気持ちを新たにした。

八幡沼開削150年記念碑を囲む有志

江戸末期、沼周辺の旧上植木村は水利に乏しかった。そのため、同村の川端宇兵衛を中心とした農民125人が、同地にあった八幡宮を移設し沼を整備することを地主に陳情。農民たちは総額500両以上の資金を工面し、3年かけて約2・8㌶の沼の工事を完遂させたと伝えられている。金額は現在の5千～6千万円と推定される。

開削150年記念碑は、先人たちの功績を後世に伝えようと、元上植木水利組合役員が発起人となって企画し、住民有志22人の寄付や協力で6月に建立した。碑には22人の氏名と、末永い保存を願う文言などを刻んだ。

沼は国道462号に隣接し、同市を流れる粕川から取水している。現在も本関町周辺の水田50㌶のかんがい用水として重要な役割を果たしている。

発起人代表の川端弥文治さんは「農業が後継者不足などで岐路に立つ今だからこそ、先人の功績を学び地域住民が連帯する願いを込めた」と話していた。

上植木地域は、旧石器時代から今日まで連綿と栄えてきたが、冷害や旱魃という自然の脅威にも直面してきた。文久二（一八六二）年の大旱魃に罹した農民は、川端宇兵衛翁を指導者として、八幡沼開削に着手し、幾多の苦難の末、元治元（一八六四）年に難工事を完遂した。大正二年、先人の偉業を讃えた八幡沼の碑が建立された。八幡沼開削は、農民による、農民のための一大事業であり、農民の理解と団結、農民自身による資金と労力の拠出により初めて可能になった。以来、当地域はたゆまぬ発展を続けてきた。平成二拾三年三月拾一日に起きた東日本大震災は、人間の絆の大切さを教えた。我々は、地域の平和と連帯があればこそ、地域の繁栄と発展が可能になるものと確信する。八幡沼は、灌漑のみならず、今や防火用水、地域の経済、産業、文化、歴史、環境、景観等の多様な価値と共に、地域の平和と連帯を象徴する貴重な市民の財産となった。平成二拾六（二〇一四）年に、八幡沼開削百五拾年を迎えるにあたり、先人達の偉業と八幡沼の碑の精神を後世に残し、末永い保存を願うと共に、その精神が後世の温故知新のよすがとなる事を願いこの碑を建立する。

平成二十五年六月吉日

発起人・世話人協賛人一同